

第54回 歴史リレー講座「古代金石文研究と拓本」 とうの 東野 治之氏 (H31.3.17)

拓本は金石文研究と切っても切れない複製技術です。対象物に紙をあて墨で叩いて凹凸を写し取る最古の複製手段で、紙を濡らす湿拓と、濡らさない乾拓という2種類があります。正確さでは湿拓の方が優れていますが、湿気を嫌う材質の場合は乾拓が利用されます。私と拓本との最初の出合いは彫刻文字や文様に関心を抱き始めた中学生ぐらいの時でした。実際にやってみるとなかなか難しく、大きなものや高所にあるものは技術だけでなく体力も必要になります。

中国における拓本の起源は書道手本の複製です。模写では数がこなせないため、有名な書家の文字を石に彫って紙に写し取ったことが始まりです。その後、遣唐使などによって法帖（拓本を折って本にしたもの）という形で日本に持ち帰られました。中国の拓本は濃い墨を使って紙の上から強く叩き込むため、白黒のコントラストがはっきりしています。しかし、回を重ねるごとに徐々に文字が磨滅して石碑自体も傷んできます。これを逆手に取れば拓本の制作年代や値打ちが推定できるので、われわれ研究者にとって一つの手掛かりになります。一方、日本の拓本は中国ほど墨が濃くないので、ほんのりと上品な仕上がりです。

「日本国首伝禅宗記碑」は平安時代に唐から禅宗を伝えた僧、義空の記念碑です。室町時代にこの碑から取られたものが、確認できる日本最初の拓本史料といわれています。また、江戸時代になると複製物が図録として流通し始め、拓本は古い物好きにとって身近な存在となりました。

拓本の最大の長所は実物大であることに尽きます。その半面、現物の持つ色合いや微妙な凸凹までは再現できません。現代では他の方法として写真はもとより、飛躍的に精度の高い3次元計測が盛んに行われています。計測結果を図面に起こしたのち型取り、色づけすることで、奥行きとともに凹凸も含めた限りなく実物に近い複製が可能です。例えば、長谷寺の近くにある飯降石仏は屋外にあるため風雨で剥落が激しく写真だけではわかりづらいのですが、3次元計測なら精密な読み取りが可能です。今後はあらゆる物に対してこの方法が活用されるでしょう。ただし、文字を正確に再現するには時間がかかるため格段に高い精度が要求されます。

法隆寺は金石文が刻まれた仏像を数多く所蔵しています。薬師如来像や釈迦三尊像、四天王像などの光背銘文を写真で観察すると、文字を彫った後にメッキしたことや字の重なり、彫り直しなどの細工痕が発見できます。これらは飛鳥時代の重要な金石文ですが、未だに文字解釈が進んでいない部分もあります。

ところで、薬師如来光背の拓本には文字の一部が白く浮き上がっている箇所があります。これは金属の溜まり部分（メクレ）が残ってしまったせいです。このほかにも、色や影などの情報に惑わされてしまい、ちな写真に較べて、拓本だと彫り方の特長や筆順の違い、文字全体の雰囲気まで見極めることができます。さらに、銘文の技法は書風の違いや罫線の有無、中には逆さまに彫られたものなどさまざまです。一行あたりの字数（定まっているもの、バラバラなもの）に注目して読むのも楽しいでしょう。

拓本を買い求める際は、本当に実物から取られたものかどうか一度疑ってみることも大切です。大量普及を目的に拓本を木に張り付けて彫った偽物（複製品）も存在するからです。しかし、専門家の手にかかれば周囲の木枠の有無や文字の細部の相違、傷やメクレの有無から見破ることが可能です。

薬師寺東塔は、ほどなく解体修理を終えて来年に落慶法要が営まれます。九輪に刻まれた銘文は複製品を塔頂に置き、本物を下で保管します。この銘文を拝むには、昔は塔のてっぺんまでよじ登らなければなりません。私は若い頃にその機会を得たものの恐ろしさで足がすくんでしまい、三層目までしかたどり着けなかった苦い経験があります。さらに高所での拓本作業はまさに命がけの作業だったはず。複製品が

出回るのというのも顔ける話ではないでしょうか。